

茨城県海外子女教育
国際理解教育研究会
2009年度 広報誌 2

会 長 あ い さ つ

帰 国 後 の 交 流 の 推 進

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会
会長 大塚 雅夫

会員の皆様、いかがお過ごしでしょうか。日頃より国際理解教育並びに海外子女教育の実践や活動にご協力いただき感謝申し上げます。茨城県からの派遣教員も300名を超え、今や大きな組織になってきました。文科省からも、在外教育施設での経験を国際理解教育に生かし、日本と諸外国との架け橋の役割を果たしてほしいことが明記されています。今までは、外国へ行くことが目的でしたが、これからは在外での経験をいかに生かしていくかが大切です。

そこで、俗称「茨海研」私たちの県の組織が大きな働きをするわけです。私自身、30年前ですが、それまで茨城県からの在外派遣はほとんどホンコンでしたが、私の派遣の前年度より、ホンコン以外の国に派遣されました。たしか、パナマ、イラク、シンガポールでしたか、記憶が定かではありませんが、3名の派遣でした。その後も派遣数は3名程度でしたが、10年位前から10数名になり、現在では20名近くまで派遣数が増えました。今後は、予算の関係で10名程度になる予定だそうです。茨城県の派遣数が全国的に見てもトップクラスである理由は、茨城県派遣の教員は、熱心で評判がよいことから、信頼があるということを知りました。素晴らしいことです。

さて、ここからが本論です。ところが、派遣後、帰国報告会には出席し、実践報告では一回り大きくなった印象があるのですが、その後の毎年の会には出席しない先生方が見られます。自分自身の帰国の時は、先輩の先生方はほぼ全員ホンコンからの帰国の先生方ばかり、ホンコン同窓会ではないかと思ったほどです。出席するのが怖かったような気持ちがありました。たしか大洗の旅館で帰国の歓迎会がありましたが、報告は3分程度、あと

はホンコンから帰国の先生方の同窓会のように、居場所がなかったような記憶があります。しかし、その後も、帰国の先生方の体験談を聞くのが楽しみで、また毎日生徒指導で追われている自分に刺激にもなるので、毎回報告会のみ参加しました。懇親会には、途中で、なにか理由をつけて帰りました。

その後、関プロ茨城大会があり、自分が副実行委員長の時、ある校長先生から「集まりが悪いね。在外派遣の先生は変わり者だからまとまりが悪いんじゃないのか。」と言われたときは少し腹が立ちました。今でも忘れません。その時に、県西地区は、後に事務所の所長になる遠藤先生を中心として県西支部を立ち上げたと言われ、次の年に県南支部を立ち上げました。その理由は、自分自身、帰国後は学校内ではなかなか体験を話す機会がなく、県の壮行会と歓迎会は毎年の行事であるが、体験談を話す時間が少ないので、地元の支部会で十分時間をかけて発表してもらえば、帰国者も聞く側もお互いに良いので、県南支部会が発足したわけです。県南支部も100名近くまでなり事務所の学校教育課長さんや担当指導主事さんも毎年出席していただき、今年で5年目を迎えました。県の方は、細野元会長さんの尽力により、義務教育課長さん、担当管理主事並びに指導主事の先生も毎年出席してくれるようになりました。いまや300人の会員の組織になりました。更に、遠藤先生が会長のおときは、県西事務所の所長さんだったので、各事務所を通して県内の全校に希望者も参加できる夏の実践研修会の案内を配布することができるようになりました。素晴らしい進歩です。

その後、水戸地区、県東地区、県北地区も支部会が発足し、報告会も充実しました。現在は、300人を超えるしっかりとした組織

です。帰国後がこれからは大切です。学校では、話せないお互いの体験談や今後の国際理解教育や再派遣の希望など、交流会で気さくに気持ちの交換をし、明日の日本を担う子どもたちを育てる役割を担っていきましょう。学校にとじこもり在外の思い出にふけるのはよくありません。「過去を振り返るのは老人、未来に向かって希望をもつのは青年」と言われます。少なくとも、私たちが在外経験のある教師は、海外での経験を基にして、大きな視野で子どもたちを教育していきたいと思いま

す。私自身、ともすると学校でも生徒指導や教科での指導に疲れてしまいそうなとき、励みになったのは、帰国報告会での体験発表でした。現在、毎年、海外に夏休みを利用して出かけていますが、それは日本から出て、日本を見つめ、自分を振り返るためです。その体験を分かち合うのも、この会の時、この会のメンバーとの語らいです。みなさん、この会を大切にしていきたい。そして、この会で気持ちが意見を交換して明日の教育に生かしていきたい。明日への夢をもって。

在外教育施設に派遣されている先生方からのお便り

ブエノスアイレス日本人学校派遣報告

平成20年度派遣
ブエノスアイレス日本人学校
教諭 武田 広 宣

1. 自然・文化・教育

日本からちょうど地球の反対側に位置するアルゼンチン。成田からブエノスアイレスまでは、約30時間弱を要します。国土の面積は日本の約7.5倍、全長は約3700kmに及び、北の亜熱帯地域、東のパンパ(大平原)、西のアンデス山脈、そして荒涼たる砂漠が広がるパタゴニア地方には氷河もあり、亜熱帯、温帯、乾燥、寒冷気候の4つの気候が一國に広がります。



アルゼンチンは南米とはいえ、最もヨーロ

ッパ的な国で、「南米のパリ」ともいわれることもあります。アルゼンチン人はプライドが高く、礼儀正しいと言われる一方で、ラテン的な「アスタ・マニャーナ(今日がだめならまた明日)」の気質を持ち、陽気で親しみやすい国民です。でも「明日でいいことは明日にしよう」という合理的な精神の反面、いつまでも『明日』が来ないこともよくあります。アルゼンチンでの教育は、中南米の中で最も進んでおり、義務教育は、5歳から14歳の児童を対象に10年間、また、中等教育3年、大学教育5~6年も国・公立教育機関の場合はすべて無料です。アルゼンチンの公用語はスペイ

ン語ですが、ヨーロッパのスペインで話されているスペイン語とは、少し異なるカステジャーノ(castellano)が話されています。

2. ブエノスアイレス日本人学校の紹介

昨年で40周年を迎えた本校の児童生徒数は、8月現在で小・中学部合わせて27名です。一時は100名以上の在籍の時代もあったそうですが、ここ数年は日本からの進出企業が減少し、駐在員の数が少ないことも影響し、減少傾向にあり、本年度は初めて複式学級も出ました。本校の特色は、小学部と中学部が協力して学校生活を送っていることです。休み時間も小中関係なくみんなでサッカーをして遊ぶ姿が見られ、様々な学校行事も中学部の生徒をリーダーに先頭に団結して成功させています。また、世界の日本人学校でも珍しく、給食が週に3日あり、子どもたち・職員とも和食や中華など馴染みの深い味に触れることができます。

(1) 学校行事について

主な学校行事の紹介をさせていただきます。運動会は5月に行われますが、季節は日本と反対の秋になります。演技の中には「フォルクローレ」と呼ばれる現地の音楽に合わせて踊るダンスを披露します。また、運動会終了後には、PTAの方や職員、子どもたちみんなで「アサード」と呼ばれる豪快なバーベキューをして懇親を深めます。



9月に行われる「学習発表会」では、合唱、ダンス、総合的な学習の発表、創作劇等が行われます。小学部全員による「カスジャーノ劇」(スペイン語での劇)を演じ、発表会当

日は、小学1年生も立派にスペイン語で劇に参加している姿に感動しました。中学部は「英語劇」を行います。英語担当教諭の腕の見せ所です。



修学旅行は、小学6年と中学2年の合同で広大なアルゼンチン内を飛行機で1時間以上かけ、4泊5日の旅行です。世界遺産や雄大な自然と文化に触れることができる絶好の機会です。

(2) 学習・研修について

日々の学習については、子どもたちは少人数学級ならではの指導を受けることができます。また、ここ南半球での季節は日本と反対のため、理科の季節に関する学習では大きく計画を変更せざるを得ません。夏場(11月～1月)は本校にてプール指導が行われ、個別指導のため、みんな泳げるようになっています。また、全学年の児童生徒に対して、現地採用教諭による週に2回のスペイン語と英会話の授業が行われています。

職員の研修は、本年は特に「自己解決力につながる具体的な評価規準の設定と支援の工夫を通して」という点に力を入れて行われており、全職員の公開授業をもとに率直な意見が飛び交い、身の引き締まる思いで授業研究会に参加しています。様々な価値観に触れ、多くのことを研修させていただいております。また、現地校との児童生徒同士の交流も年間を通じて行われ、折り紙や習字、昔の遊びなど日本の文化を紹介し、楽しく過ごしています。

3. 終わりに

この度、在外教育施設での様子を報告させていただき機会を得まして、茨海研の皆様ならびに関係各位に深く感謝申し上げます。日本の地球の反対側、ここブエノスアイレスでの仕事や生活を客観的に見つめることで、改めて自己の使命を再確認し、心新たに精進して参る決意です。

北京日本人学校での貴重な経験

平成19年度派遣
北京日本人学校
教諭 小杉 正憲

平成19年度派遣教員として、中国の首都北京にある「北京日本人学校」に赴任して3年目を迎えました。北京日本人学校は、小学部・中学部が併設されていて、全校生徒は650人程度、中規模の学校です。それらの児童生徒が同じ校舎で学んでいます。学校の特徴ある活動としては、たてわり班活動があげられます。これは、全校を30班に分け、1つの班に小学部1年から中学部3年までが入って活動するものです。毎日の清掃活動、月1回のたてわり班昼食会、全校遠足などの活動もこのたてわり班で行っています。中学部の生徒にとって小学部の児童と接することは、優しい気持ちを育てるだけでなく、リーダー性を身につけることにもつながっています。そして、もう1つの特徴ある活動として、「希望小学校社会貢献活動」があげられます。この活動を説明するにあたって、北京周辺の様子について少し話したいと思います。

昨年オリンピックが開かれ、その影響もあってか街はますます発展しています。しかし、北京を少し離れると、昔ながらの農村が広がっています。そのような場所に、北京日本人会が10校の希望小学校(ボランティアで作られた学校。貧しい農村部に建設され、企業が作ったもの、退役軍人が作ったものなど様々なものがある)を建設しました。

それらの学校に対して、北京日本人学校として何かできないかと考えました。その結果、子どもたちの委員会活動の1つであるリサイクル委員会が全校児童生徒に呼びかけてリサイクル運動を実施し、そこから得られた資金を元に、運動用具や学習用品などを購入し寄贈しています。さらに、物質的な援助の他に、我々派遣教員ができることとして、毎年夏休みに希望小学校を訪問し、社会貢献活動を行っています。これが先ほどあげた「希望小学校社会貢献活動」です。具体的には、教員を3つのチームに分け、毎年3校の希望小学校を訪問し、授業を行っています。言葉の壁はもちろんありますが、中国人スタッフの協力を得ながら、教員各々の持ち味を生かした授業を計画し、希望小学校の子どもたちとともに学習しています。3日間という短い時間ではありますが、そこには多くのふれあいと感動があります。真の国際交流とは何なのか、私たちがしなければならぬことは何なのか

という課題に対するヒントを得る貴重な機会となっています。子どもたちの澄んだ瞳と屈託のない笑顔には、私たちが忘れかけている学ぶべき多くのものがあるような気がしています。



ここで日本と比較してみると、日本には様々な教育機器があります。しかし、この希望小学校には、北京日本人学校でかつて使っていた机と椅子、板を緑色に塗っただけの黒板、文房具しかありません。そんな中で学習している子どもたちの熱意は、日本の子どもたちに勝るものでした。汚れた教科書を丁寧に使い、汚れたノートに一生懸命文字を書き写す姿には、感動すら覚えました。ここに、学びの原点を見る思いもしました。

私は、この社会貢献活動で、算数の授業をさせていただきました。日本では小5で扱う「タングラム」を取り上げて授業を展開しま



した。タングラムは元々は中国から入ってきたもので「七巧図」と呼ばれているものですが、知らない子どもが多かったです。黒板にタングラムの拡大図を貼っただけで大きな反応、課題を提示すればいち早く解決したいと取り組む子どもたち……。用意してきた中国語を使って、中国語だけで授業をしようとして練習してきた私の中国語に、真剣に耳を傾けてくれる子どもたち……。そして、1つできるたびに、うれしそうに挙手して知らせてくれる子どもたち……。すべてのことが、教員として働き始めたときの原点の気持ちに戻してくれました。自分の授業以外にも、他

の教員の補助として各グループに入ったり、休み時間に寄贈物品で渡したボールやラケットを使って汗を流したり、日本式のカレーと一緒に作ったり、子どもたちにとって初めて見る楽器での合奏にチャレンジさせたりするなど、多くの経験をさせていただきました。



これらの経験ができたからこそ、新たな気持ちになれた自分がいるように感じます。このような経験をさせていただいたことに感謝し、今後も日本の子どもたちのために全力で取り組んでいきたいと考えています。

釜山に赴任して

平成 21 年度派遣
釜山日本人学校
奥井隆行

1 釜山日本人学校の紹介

釜山日本人学校は、海外にある80余校の日本人学校の中で、最も日本に近い大韓民国釜山広域市の中にあります。学校から500m程の場所にある「広安里(クワンアンリ)」海岸からは、天気が良く空気が澄んでいる日には日本の対馬の島影を見ることもできます。また、この海岸は、韓国有数の海水浴場で夏になるとたくさんの人々が訪れ、海岸通りには大きなホテルやおしゃれなお店が建ち並ぶリゾート地です。本校には小学部と中学部があり、37名(H21.4現在)の子どもたちが勉強に励んでいます。「狭いながらも楽しい我が家」をキャッチフレーズにして、学部に関係なく、みんなで楽しく仲良く「学び」に「遊び」に活動しています。図工や体育などは、学年の枠を取り払って、ともに学びあいを行っています。掃除の時間には、小学生と中学生が一緒になって、縦割りグループ(ファミリー)を作り、掃除道具の使い方や掃除の仕方など、上級生が下級生の子どもたちに教えながらしています。また、海外にいるからこそ学べる活動として、現地の初等学校やインターナショナルスクールとの三校交流会、韓国の文化に触れる活動、さらに、韓

国にお嫁さんに来られた日本人妻の方々が暮らしている養護老人施設「慶州ナザレ園」訪問や、同じく釜山市内にいらっしゃる芙蓉会のおばあさん方との交流など、毎年、創意工夫をこらして活発に取り組んでいます。



2 釜山での生活

釜山は、自然も日本とよく似ており、日本と同じようなものを町の風景をあちこちでたくさん見かけます。話をしなければ、町にあふれるハングルさえ見なければ、「ここは日本」と錯覚を起こしてしまうそんな町です。韓国の人に道を聞かれて困ってしまうことも多いくらいです。しかし、当地は紛れもなく外国です。街中にハングル文字が溢れ、言語・習慣・文化の違いに驚かれることが多々あります。赴任してまだ数ヶ月ですが、生活の中で感じたことを2つ書きます。

1つめは、韓国（釜山）の人々はバイタリ

ティーにあふれているということです。よく働き、よく食べ、よく飲み、よく遊び、よく学び、よく運動します。朝5時に海岸沿いの通りに出ると、大勢の人たちがウォーキングやランニングをしています。また、アパートの一角や街中に運動器具が設置されていて、多くの人たちがそれを利用しています。また、夜11時に街を歩くと、互いに酒を酌みかわし、肩をたたき合いながら盛り上がる様子を目にします。朝早くから夜遅くまで、街全体がエネルギーに満ちあふれている印象をもちます。



2つめは、人に対して非常に親切であるということです。日本では、見知らぬ人に話しかけられると一瞬身構えます。しかし、ここではどんどん話しかけられます。街中で地図をもって立っていると「どうしたんだ。どこに行きたいんだ」と話しかけてきます。身振り手振りで説明すると、同じ方向だからと言って案内してくれることもあります。特に子どもには優しく、地下鉄の中で子どもが泣いていると、みんなであやそうとします。飴をくれたりもします。食事をすると、子どもが食べやすい辛いものをつくって無料で出してくれることもありました。

このように現在、バイタリティーあふれる

街で、親切な人々に囲まれて生活しています。しかし、日本との交流の中心地、発信地であった釜山に住むことで、両国がいかに時代に翻弄されてきたのかを知る機会も得ました。10数年前までは日本人学校の職員は公共の乗り物の中で日本語を話すことを我慢し、校門に日本人学校の看板を掲げることができなかったそうです。そのような事情を知り、現在の自分の生活を考え、複雑な思いをもちながら赴任期間を過ごしています。

香港日本人学校派遣報告

平成 21 年度派遣
香港日本人学校小学部香港校
教諭 笠井 博貴

新型インフルエンザが世界的に流行した2009年。香港にもその影響があり、新型インフルエンザへの対応として、6月12日から香港政府当局の指示により1ヶ月以上もの間、休校が続くという事態になりました。その間、子どもたちの心のケアのための電話連絡や休校中の課題づくりなど、休校措置への対応に追われる日々が続きましたが、今までの教員生活では経験したことのない貴重な体験を赴任1年目から経験することができ、多くのことを学ぶことができました。

今回は、香港日本人学校小学部香港校について報告したいと思います。

香港日本人学校小学部香港校は、1966年に在香港邦人の熱意と子どもたちへの教育への強い願いのもとに創立された香港日本人学校の伝統を直接受け継ぐ学校であり、香港における邦人子女教育の中心として貢献してきました。

本校は開校当初から、阿部信行校長先生をはじめ、茨城県から数多くの諸先輩先生方が派遣され、子どもたちのためにご尽力された功績が今なお多く残っているなど、茨城県とは大変縁の深い学校です。

本校は香港島のほぼ中央部の高台に位置しています。

学校のすぐ後ろには遊歩道が整備された山があり、生活科や理科の学習、



中学年での社会科見学などで登ります。また、フレンチインターナショナルスクールやマリーマウントプライマリースクール(ユニセフ親善大使アグネス・チャン氏の出身校)などが隣接する静かな文教地区でもあります。そして、坂を下ると摩天楼の居並ぶ香港の中央市街に出ることができ、世界経済の一大拠点である大都市香港の活気と繁栄を目のあたりにできる環境にあります。

『国際社会の中で互いを認め合い、豊かな心と確かな学力をもち、自立したたくましい児童の育成』を教育目標として掲げ、海外で生活しているという利点を生かして国際理解教育に力を入れた様々な教育活動が行われています。今回は、その中の英会話教育とイマージョン教育について紹介します。

英会話の授業は全学年、週3回行われています。子どもたちは授業で speaking, listening, reading, writing を学んでいます。英語が楽しくなるような参加型の学習で授業が行われ、2年生以上は英語力によって7つのレベルに分けられています。1クラス10人程度で授業が行われているので、一人ひとりの子どもが英語を話したり、読んだりする機会が多くなり、生き生きとした発音が身についています。その他、昼の時間を使って、Storytelling, English Picnic, English Karuta などといった活動も行われ、より実践的な英語力の向上が図られています。



イマージョン教育とは通常の教科の授業を第二言語で教えることにより、子どもたちに自然に第二言語(本校では英語)を習得させる教育プログラムのことです。イマージョン教育では、英語が教授の対象ではなく、教科内容を指導する手段として使われています。本校のイマージョン教育は、4年生以上の図工科において行われ、英語で授業を行う教員とそれをサポートする日本人教員によるチームティーチングで指導が行われています。授業における説明は原則として英語で行われますが、安全面に關わることや英語による説

明が難しいような場合には、日本語による補足説明も行っています。

日常会話の中で英語が普通に使われている香港において英語への興味をもつことは、地域社会に対する関心を高め、地域を理解することにもつながっていくと考えられます。本校では、英会話教育や図工科による英語イメージ教育だけでなく、現地校との交流、各教科・特別活動を通しての現地理解教育なども積極的に行われています。このように、学校の教育活動の様々な場面で英語に関わることを通して、本校の子どもたちは英語を使って自分の思いや考えを表現したり、相手の考えや思いを理解したりする力を身につけています。

香港に来て5ヶ月。まだまだ香港について知らないことが多く、毎日が発見と勉強の連続です。日本を離れて学べるというすばらしい経験を無駄にしないよう、子どもたちのために職務を遂行するとともに、香港で出会う多くの人達との関わりや異文化体験を通して、自分自身の国際感覚を広めていくことができると考えています。

パリ雑感

20年度派遣

パリ日本人学校
成井真里子

学校は、パリの西約30kmほどのモンテニエー市にあります。19年前にパリ市内にあった校舎が手狭になり、ここに引っ越してきました。パリからは、電車や車で約30分。子ども達は、ほとんどがパリ在住で、スクールバスで通学します。広いグラウンドや体育館は、パリではなかなか確保できない貴重な運動スペースになっています。学校の周辺には、釣りやヨットも楽しめるサンカンタン池、隣町には、ベルサイユ宮殿、大きなスーパーや郵便局、銀行など生活面も充実していて、自然・歴史・衣食住とどれも申し分ない好環境です。

学校は、小学部と中学部があり、全校児童生徒は約220名。転出入が大変多く、4月と3月では、学級のメンバーがかなり違ってしまいます。

海外で暮らす厳しさや転校の大変さを全員が知っているからか、子ども達は、思いやりにあふれ、協力や奉仕の気持ちをとても強く持っています。転入してきたばかりの子が一人きりになることはなく、誰もが自然に声をかけてサポートできることに感心します。小学部と中学部が同じ校舎にいて、運動

会など様々に触れ合う機会があり、下級生を支援することや上級生を目標にすることなどお互いに刺激されながら生活できることも利点です。

学校行事は多彩です。運動会、日本人学校まつり、学習発表会などの大きな行事に加え、フランスの子ども達と触れ合う「現地校交流」、ベルサイユ宮殿の庭園に全校児童で出かける「秋の遠足」。「社会見学」では、各学年がルーブル美術館、オルセー美術館など様々な美術館や下水道や郵便局などの施設、パリ近郊のモネやゴッホのアトリエ等を訪ねます。フランスの素晴らしい文化を堪能できることを大事にしたいと思います。

反面、海外生活が長い子ども達は、日本の日常生活で自然に見聞きする情報がない分、語彙の習得の面で厳しい環境にあります。高学年でも「歩道橋ってなんですか。」などという質問が出ることもあります。日本語や文化について、意識を高く持ち、丁寧に教えていきたいと強く感じています。

学校から帰るのは、常に21時過ぎ。仕事は多いのですが、短い派遣期間で力を尽くし、あれもしたかった、これも・・・と後悔のないように仕事をしたい。そんなことを思いながら走り続ける毎日です。

おまけ フランス生活

スーパーのパン売り場には、鳩が飛び、卵売り場には、ネズミがちょろちょろ、(これで魚売り場に猫がいればカンペキ)腐った果物も陳列されています。従って客は、良い品物を選んで買う必要があり、買い物も油断できません。レジに並べば、だらだらとしゃべりながらレジ打ちする店員、もたもたと財布を探す客。当然いつも長蛇の列です。しかし、文句を言ったりイライラしたりする人は、ゼロ。ジュースの自販機は故障が多く、「大きな貯金箱」と言う人もいます。アパートの電気契約では、「今日の3時頃電気会社の人に来るから必ず在宅してて！これを逃すといつ契約できるか分からないからね！」と言われ、郵便の不在票があれば、即取りに行かないと荷物がどこかへ行ってしまうという・・・日本では、「有り得ない！！」ということばかり。怒りを乗り越えて笑う(しかない)毎日です。でも、案外これが世界基準なのかもしれません。自己責任、自己管理、自力解決が求められます。日本の細やかさを素晴らしいと思うと同時に、なんと温室育ちな日本人だろうと改めて考えさせられます。

何か起こって当たり前。「しかたない、こ

こはフランスだもん。」と余裕の構えができるのも、私にとってひとつの成長と言えるかもしれません。



雪が降りました。教室からの風景です



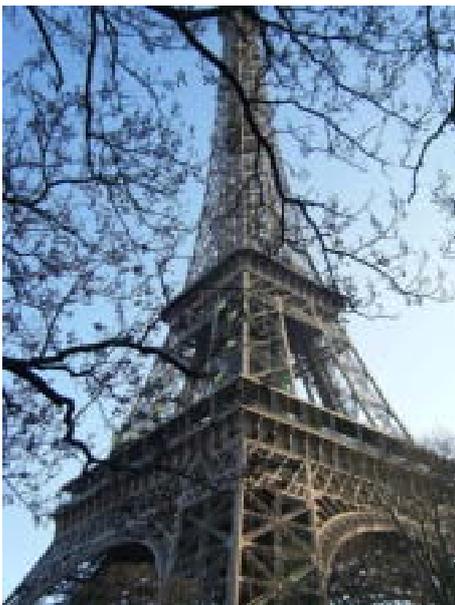
セーヌ河とエッフェル塔



定時にエッフェル塔は光ります。



パリ日本人学校入り口



タイプーサム（ヒンドゥー教の祭り）

クアラルンプール日本人学校

檜山 和寿

今年でマレーシアのクアラルンプールでの生活も3年目になります。「あっという間に時間が過ぎてしまった。」というのが実感です。

さて、今回は今までレポートしてきたことと趣向を変え「タイプーサム」を中心にマレーシアのことをレポートしてみたいと思います。

ここマレーシアの主な民族構成は、マレー系65%、中国系25.6%、インド系7.5%、その他1.3%となっています。その他のなかには、オランアスリといった、先住民などが含まれます。マレー半島に約5万人ほど住んでいるそうです。未だに子ども達は一般のマレー人達とは違った学校に通うなど、自分たちの文化が他の文化に影響を受けることを好まない民族とのことでした。さらに、その一部は電気もない未だに文明社会とは隔絶した生活を送っているようで、時々山中で偶然出会うことがあるぐらいで、詳しい生活の様子は分かっていないという話も聞きます。そのような人々が街中からそう遠くない山中にいるということが、日本出身の自分としては、大変驚きでした。

話は戻りますが、首都クアラルンプールでは上記の割合程、それぞれの民族の構成数に差はないように感じます。印象としては、ほぼ同じぐらいなのではないかといった印象です。そのため、いたるところに、モスク（マレー系）や中国寺院（中国系）、ヒンドゥー寺院（インド系）を見かけます。

今回中心としてレポートする「タイプーサム」とは、ヒンドゥー教のお祭りの一つです。インド本国でのお祭りのことは詳しく分かりませんが、ここマレーシアでは、ヒンドゥー教の大きな祭りとして、「デパバリ」と「タイプーサム」があげられます。「デパバリ」は「光の祭り」とも言われています。ヒンドゥー教の神話として多くの話が伝えられていますが、悪に対する善、暗闇に対する光の勝利を祝うお祭りです。沢山のろうそくやオイルランプを家に飾り神を歓迎します。「デパバリ」は国教がイスラム教にもかかわらず、ほとんどの州（13州+連邦特別区3の中14州（区）2006年現在）で祭日になっています。それと同様に、クリスマスや中国暦新年、釈迦誕生の日も祝祭日となっています。この辺は、多民族国家であるマレーシアならではの祝祭日だと思います。それぞれの文化、宗教を尊重している姿勢が現れています。

「タイプーサム」は「デパバリ」ほどではありませんが、祝日にしている州がいくつかあります（5州 2006現在）。この祭りは、ヒンドゥー教3大神の一人、シバ神の息子ムルガ神をまつる祭りです。ヒンドゥー暦の10月に行われます。一昨年は1月、昨年は2月に行われました。

この「タイプーサム」ですが、ちょっと日本ではお目にかかれない祭りです。もともとヒンドゥー教内のシバ派は、修行として苦行を重んじています。その息子ムルガの祭りですから、信者達は、ムルガに感謝と篤い信仰を示すために、苦行のような祭りを行います。具体的には、体に串やかぎ針を突き刺し、カバァディと呼ばれる、大きな物を担いで練り歩きます。クアラルンプールでは市街地のヒンドゥー寺院からバトゥーケーブというヒンドゥー教の聖地まで練り歩きます。距離にして12キロほどでしょうか。10名ほどの楽団が彼らの周りを囲み音楽（主に太鼓）を鳴り響かせ、彼らをもり立てます。苦行をしている参加者は見た感じではトランス状態になっている雰囲気を出し、目がうつろになっている人がほとんどです。しかし大きな声で叫んだりしています。そういったグループが数え切れないほど参加し、バトゥーケーブは異様な雰囲気に入れられ、身動きができない程です。

この祭りで苦行をする参加者は、数ヶ月、又は数週間の間、完全なベジタリアンとなり、さらには断食も行って心身を整え当日を待ちます。また寝るのは床で寝るとのこと。不思議なことに、体中に針や串を刺していながら血が出なかったり、傷が残ったりしないとのことでした。

ちなみに、発祥地であるインドでは、現在、危険であるという理由でこの行事は禁止されているそうです。現在ではもしかするとマレーシアだけでしか見ることはできないお祭りかもしれません。日本の祭りとはほど遠い雰囲気のお祭りですが、もし機会があれば見に来てください。







大連日本人学校

大連日本人学校

教頭 青葉 正之

1 大連市の様子

中国は、社会主義体制を保ちながらも資本主義自由経済原理を採用し、時代の大きなうねりの中で世界にも多大なる影響をもっています。その中であって、経済開発区として外資系企業の進出や自由市場の活況著しい、大連の日々の変化には目を見張るものがあります。デパートは、新築や改装ラッシュで、数日通らなかつただけで街の景観が変わってしまうこともしばしばです。少し古い生活情報を頼りにすると戸惑ってしまうこともあります。また、街行く人は色鮮やかに着飾り、商店にも品物が溢れています。

一方、人々は状況や環境の変化に対して、旧態依然として「大陸的」と言われるものがあります。街の往来は、車も人も信号なしに我が物顔のようすです。また、大連人の人柄はとても温厚で、幸いにして、日本人にとっては古くからなじみのある土地ゆえに対日感情もよい方だと思います。

大連市にはいくつかの行事があります。まず一つ目は、「アカシア祭り」です。これは大連市が、5月下旬からアカシアの白い花房や甘い芳香に包まれる事からつけられたお祭りです。この時期に合わせていろいろな行事もたれます。7月には国際ビール祭りが盛大に行われます。そして毎年9月には、ファッションの街、大連を象徴する「大連国際ファッション祭り」が開催され、大連のあちこちでパレードや催し物等が開催されます。

このように、現在の大連はクラシックな要素をとどめつつも、モダンな高層ビルが立ち並び近代都市となっています。街並みも道行く人もファッションナブルであり、“北の香港”とも呼ばれています。治安も良く、2004年12月には、国連によってカナダのバンクーバーと共に「世界で最も安全な都市」に選ばれています。また、2007年9月の夏にはダボス会議（世界経済フォーラム）が大連で開催され、国際都市として着実な進歩を遂げようとしています。

2 大連日本人学校の概要

(1) 大連日本人学校の沿革等

本校は平成6年4月に開校された学校です。前身の補習授業校は平成2年からスタートし、一昨年度より施設も少しずつ拡張され、児童・生徒数も多少増加傾向にあります。平成21年度9月現在の在籍数は、小学部129名、中学部49名、合計168名となっています。

本校は「中国民航」という航空会社が保有する保養施設「民航療養院」の敷地内に位置し、海辺の景勝地にあります。使用している建物は、療養所施設の一部を借用し、学校用に手を加えて本校の校舎としています。もともと学校用として建てられたものではありませんが、校舎の壁面や内装工事、講堂の改築、教室床のフローリング工事、各教室へのエアコン設置と着々と整備が進められています。また、平成19年度からは保健室、理科室、図書室が整備され、グラウンドも人工芝になるなど、学校としての環境も整ってきました。更に平成20年度には、校舎の北側の壁を補修工事し、教室の壁も新しく塗り直しました。

体育館も「民航療養院」のものを借用しています。あらかじめ毎月の時間割等を先方に伝え、授業に支障の無いよう

に配慮しながら使用しています。グラウンドにはサッカーゴールや鉄棒，滑り台，ジャングルジム，ブランコ等の遊具が設置されており，平成20年度にはバスケットゴールも設置されました。

(2) 行事

基本的には，日本国内と同様なものに，現地の特色や実態を織り込みながら季節に応じた行事を実施しています。

| 主な行事 | 活動内容 |
|--|--|
| <p><春の遠足 (小学部)> 【5月】</p>  | <p>バスと徒歩により，水族館や公園に出かけています。公園を歩いたり，水族館やイルカのショーなどを見学したりします。遠足場所は3年のローテーションで行っています。20年度老虎灘海洋公園，21年度星海公園，22年度東海公園・棒錘島となっています。</p> |
| <p><登山 (中学部)> 【5月】</p>  | <p>バスで1時間くらいの郊外にある大黒山という山に登り，自然を満喫します。中学部1年～中学部3年全員で実施します。</p> |
| <p><フィールドワーク> 【6月】</p>  | <p>小5が総合的な学習の時間の一環として実施しています。大連市内を公共の乗り物を使用して，大連市の特徴的な観光地や施設を回ります。</p> |
| <p><修学旅行> 【6月】</p>  | <p>小6，中2が対象です。2年ごとに北京と瀋陽にて実施していました。16，17年度は瀋陽を2泊3日で訪れ，18，19年度は，北京で実施しました。今年度(20年度)は瀋陽に代わり，西安を訪問し，来年度(21年度)も西安を訪問，22年度は北京を訪問する予定です。</p> |

| | |
|--|---|
| <p>< 芸術鑑賞会 > 【7月】</p>  | <p>昨年度は「大連京劇団」による京劇の鑑賞を行いました。化粧や動作等の体験学習も交えて中国の文化に触れました。今年度は「大連雑技団」による雑技の鑑賞を行いました。更に、各種雑技の体験学習も行いました。体験を通し、改めて中国文化の素晴らしさを感じることができました。隔年で京劇、雑技を鑑賞する予定です。</p> |
| <p>< 運動会 > 【9月】</p>  | <p>全校児童生徒が赤白に分かれて実施します。また、現地の小中学生にも参加してもらい、交流の場としています。</p> |
| <p>< 秋の遠足（小学部） > 【10月末】</p>  | <p>小学部の児童が縦割り班を結成し、学校の近くにある森林動物園で班別行動します。</p> |
| <p>< 旅順平和学習（6年生） > 【10月】</p>  | <p>小学部6年生が校外学習として、旅順にある史跡を見学します。</p> |
| <p>< マラソン大会 > 【10月】</p>  | <p>かけ足週間を設定し、「業間かけ足」に全校で取り組みます。そのまとめとして学年の発達段階に応じた距離を走ります。</p> |

| | |
|--|---|
| <p>< 学習発表会(小学部) > 【11月】</p>  | <p>学年ごとに、工夫を凝らした学習の発表を、理事の方や現地企業の方・保護者を招いて行います。</p> |
| <p>< 総合的な学習の時間発表会(中学部) > 【12月】</p>  | <p>保護者を招いて総合的な学習の時間で取り組んだ内容の発表を行います。また、現地企業の方に講話をしていただくこともあります。</p> |
| <p>< 校外学習 > 【各学年2回程度】</p>  | <p>総合的な学習の時間、社会科、生活科の授業の一環として行っています。現地の公園や市場、料理店、テレビ局、飛行場等を訪れたり、日中合弁の工場等を訪れたりしています。</p> |
| <p>< 国際交流 > 【年に数回】</p>  | <p>現地校である桃源小学校や第十六中学校と交流を行っています。お互いにそれぞれの学校で体験学習等の交流を継続して行っています。</p> |



(4) 通学方法

各居住区所有のバス等で登下校しています。最近は、自主通学者（各保護者が自家用車やタクシー等で児童生徒を送迎する）も増えています。また、不測の事態に対応できるように、緊急車として学校バス1台、学校ワゴン車1台を常駐しています。

広報・研修担当者よりのお知らせ

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会では、年2回広報紙「SECO」を発行しております。毎年第2号は雑感的なものをまとめたものです。帰国した会員や在外教育施設に派遣されている会員の現状を知ってもらい、情報交換をするためには、意味のあるものです。しかし、これだけにとどまらず、毎年第1号では、海外での現地理理解教育・国際理解教育や日本での国際理解教育について、広く原稿を募集し、会員やその他の皆様の教育に資するものを作成したいと考えております。そこで、下記の通り現地理理解教育・国際理解教育に関する原稿を募集いたしますので、応募をお願いいたします。

記

- 1 内容（研究テーマ）
 在外教育施設や国内の学校で行った現地理理解教育・国際理解教育に関する研究派遣国理解に資する資料（自分でまとめたものに限る）
 外国人児童生徒の日本への適応に資する研究（生活指導や日本語指導も含む）
- 2 応募資格
 ・本会会員及び会長が認めたもの
- 3 応募規定
 - (1) 応募条件
 未発表の論文や研究に限る
 1人一篇とする。共同執筆も可。

- (2) 形式・タイトル等
 論文作成に当たっては、パソコンで「一太郎」もしくは「ワード」を使用のこと（手書き原稿は不可）。
 A4用紙使用、縦置き・横書き（40字×50行）とする。
 論文の構成は、表紙・要旨・本文とする（但し、それぞれ別葉にすること）。
 表紙には、次の事項を記載のこと。
 ア．研究テーマ
 イ．氏名
 ウ．派遣国
 エ．派遣年度（会員以外の場合は、ウ、エは記入の必要はありません。）
 オ．学校名
 カ．学校住所
 キ．学校電話番号
 共同執筆の場合は、代表者の後に「代表」と記入し、共同執筆者全員の氏名を記載すること。
 要旨は、2,000字以内とする。
 本文
 ア 制限枚数
 上記の様式で10枚以内（図表、注釈、参考文献等含む）。
 表紙、要旨は、本文には含めない。
 イ 参考・引用文献については、出典を明記のこと。

4 締切

・平成21年5月31日

送付先

〒311-2423
茨城県潮来市日の出2-25-16
河嶋 賢一

5 提出先

・できるだけEメールの添付ファイルにて
送信してください。

アドレス

kouhouibakai@yahoo.co.jp

6 その他

・応募者多数の場合は、茨海研のホームページのみの記載となることもあることを
ご了解下さい。

・Eメールで送信することができない場合
には、下記住所までFD, CD-R等の
記憶媒体に入力して送付してください。

あ と が き

ここに、2009年度の広報誌第2号をお
届けします。

会長の大塚校長先生を始め、原稿をお寄せ
いただいた7名の先生方に感謝申し上げます。
ありがとうございました。

日本では、政権が交代し、時代が大きく変
わるのではないかと思いましたが、その流れ
も滞りがちで、失望感を抱いている人も多い
ようです。内閣の支持率も日ごとに急落して
います。リーダーの資質がいかに大切である
かを痛感しました。視野を広められるよう日
々研修に励みたいものです。

日々の雑務に追われ、海外での生活が遠い
記憶の彼方に去りつつある私にとって、この
広報誌と毎月送られてくる「JICA
MONTHLY」が私と海外を結ぶ接点です。こ

の広報誌が、帰国された先生方には海外との
接点に、そして在外教育施設に派遣されてい
る先生方には、日本との接点になってくれ
ばいいなと感じながら編集しました。

広報誌は、下記のホームページアドレスで
もご覧いただけるようになりました。興味
のある方は、ご覧下さい。ホームページアド
レス - <http://www.zenkaiken.net/~ibaragi/>

今後も「茨城県海外子女教育・国際理解教
育研究会広報誌SECO」をよりよいものにして
いきたいと思っておりますので、広報誌に関するご
意見がございましたら、広報・研修担当役員
まで遠慮なくご連絡ください。なお、Eメー
ルでのご意見は、下記のメールアドレスまで
お寄せ下さい。Eメールアドレス
(kouhouibakai@yahoo.co.jp)(文責 河嶋)

